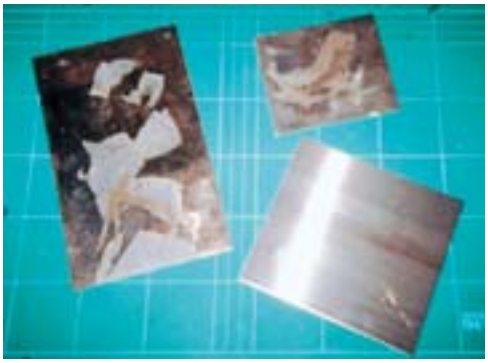
銅と暮らす

画家　イラストレーター　牛尾　篤

銅版画用プレス機



ニスを塗る前の銅版画

ニスを塗った後、銅版に絵を描いたところ

銅に囲まれ、銅に触れ、銅と戯れて日々生活している。のっけからこんなことを書くと、銅細工の職人かと思われそうだが、私の職業は銅版画家である。部屋の中は銅版だらけなので、一日中銅の中で暮らしているというのは、あながち大げさな表現ではないと思っている。

銅版画との出合いは美術大学に通っていた頃だった。聖書の中の物語を描いたヨーロッパ中世の作品や、池田満寿夫の作品が銅版画であることは知っていた。しかしどんな風にして、銅版から版画作品が生み出されるのかさっぱりわからなかった。

大学では油絵科というところに入っていたので、授業はくる日もくる日もデッサンとキャンバスに油絵具を塗りたくる日々。油絵というものはモナリザからゴッホのひまわりまで、実に多様な表現が可能である。ゴッホのように感情を叩きつける絵にするのか、中世の画家の様に、下絵から始まりきっちりとリアルな表現を目指すのか、はたまた何も描かないのか。夥しい過去の美術作品を前に多くの美術学生は思い悩むのである。ご多分にもれず私も、毎日絵具をキャンバスにつけたり取ったりと自分のスタイルを見い出せないまま、モヤモヤとした気分で絵を描いていた。

そんな時、気分転換で描いた私のペン画を見た友人が、銅版画が向いているんじゃないかと言ってくれた。気の早い私は、熱がさめないうちにとさっそく大学の銅版画教室に通うことに決めた。

ではざっと銅版画が刷り上がるまでを説明してみよう。私が使うのは〇・八ミリの厚さの銅版である。片面に腐食止めのたけ壁紙をはり、片面にはグランドといわれる茶色のニスを塗る。

このグランドが乾いたのち、ニードルという鉄筆のようなもので銅版の上にカリカリと線で描いていく。グランドのニスは柔らかく簡単にとれていくが、ニードルの先が銅版に引っかかるので、紙に描くのと違いかなり抵抗感がある。

描いた線の部分は、銅の生地がむき出しになっていて腐触液の中につけると、線の部分のみ、溝になって刻み込まれるが、他の部分はグランドのニスが、防触膜となり腐触さ

銅版画用ニードル各種

銅版画による個展

れないようになっている。

銅版の線の部分にインクをつめ、プレス機の鉄版の上に置き、その上に紙、フェルトをかけ、上、下二つのプレス機のローラーの間を通って銅版画は刷り上がる。プレス機の原理はスパゲッティの麺をうすくのばす様な圧力をかけて、紙に銅版のインクを押しつけると考えるとわかりやすいだろうか。

そして紙を銅版からめくる瞬間が、一番不安でもあり、楽しみな時間である。紙をめくるとそこには、インクが紙にめり込むようにしてついている。原治的な印刷技術ではあるものの、刷らなくては作品を見ることが出来ないことは、私にとって新鮮な驚きだった。

油絵の場合、制作の始めから終わりまで画家はすべてを見ることが出来る。一枚の絵が完成したということを決定するのは、画家の気持ちしだいということになる。

絵のスタイルも決定できず、画面をいじくりまわしていた学生の私にとって、刷った時点でひとまずその絵は完成ということが、私の気持ちを楽にしてくれたのである。

そしてあたりまえといってしまえばそれまでだが、同じ作品が何枚も出来る面白さ。同じ絵でありながら、一枚一枚にはインクが盛り上がってついていて、マチエール（絵肌）がありオリジナルな作品として、油絵に勝るとも劣らない銅版画の魅力にどんどんひき込まれていった。

パーソナルコンピューターや、プリントゴッコが普及した現在でも、銅版画を試みる人は多い。コンピューターを使いこなして、絵を描いている人でも、銅版画を始めてみると面白いという。

先ほど説明したように、決して簡単な工程とはいえない手順をふまなければ、銅版画は刷るところまでたどり着けない。どんなに時代が便利に変化していっても、銅版画を試みる人は減ることはないと思う。

それはやはり銅という金属の重さ、そしてあの不思議な輝きに、人が魅せられるからかもしれない。

牛尾　篤氏　略歴　　画家　イラストレーター

1958年、島根県生まれ。多摩美術大学卒業後、ウィーン国立応用美術大学に留学。
青木画廊、片山画廊、東京会館ギャラリー他、秋田、新潟、鎌倉、三重、広島、高知、北九州にて個展。ロサンゼルスカウンティ美術館に作品収蔵。
装丁の仕事に、「若きウェルテルの悩み」ゲーテ著（新潮文庫）。「白い兎が逃げる」有栖川有栖著（光文社ノベルズ）。「霧の夜の戦慄」川次郎著（角川書店）。「あやかしの声」阿刀田高著（新潮文庫）。他多数。著者「憧れのウィーン便り」（トラベルジャーナル社）。